

第1回確認会議で確認事項とされたもの

1 必要性

- ・幌延深地層研究センターの意義や役割を一般の人でも分かるように説明すること。
- ・幌延深地層研究センターの研究成果の具体的な活用方法を説明すること。
- ・地下研究施設と処分地選定プロセスにおける地下調査施設の違いを説明すること。
- ・幌延深地層研究センターが地下研究施設か地下調査施設になるのかの位置付けを明確にすること。
- ・当初計画を延長するに至った経緯と理由。
- ・各研究課題の共通として、研究目的、外部評価、機構の自己評価、成果・達成度、今後の研究内容に対する当初計画との関連性、今後続ける理由、幌延で行う理由、いつからいつまでなのか。
- ・それぞれの研究単位での必要性。
- ・トレーサー試験（非放射性核種ストロンチウム、セシウム）について、協定書や確認書の範囲内でどのように行われるのかをもっと具体的に説明すること。
- ・地殻変動に対する堆積岩の緩衝能力の検証について、大型の断層で展開することについて具体的などころが分からない。大曲断層まで地下施設から距離があるように見えるが、資料では分かりづらい、どのような展開を考えているのか説明すること。
- ・地下研究施設は世界でも数が限られたもので、その中で調査する課題があるが、世界各国の共有の課題と地域性（その場所特有）の課題があると思うが、役割分担、国際的な協力体制がどのようになっているのか説明すること。
- ・研究課題が国際的にどのような役割を持つのか説明すること。
- ・国際プロジェクトでの状況と日本国内での状況の違いを踏まえ、国内、特に幌延でやらなければならない理由を具体的な研究内容とともに、この研究をしなければ日本国内で埋め立て処分することが出来ないことを、国際プロジェクトとの関係と合わせて説明すること。
- ・海外で放射性廃棄物処分のことを既に実施している国があり、研究が進んでいる国もあることから、幌延での地層処分研究が必要な理由を地質の観点から明確に説明すること。
- ・放射性物質がどのぐらいで漏れることが許容されるので、ここまで漏れが抑えられたら、放射性廃棄物の処分をやって良いといった大前提を説明すること。
- ・放射性廃棄物処分の安全性を保証するための技術的な必要性を具体的に説明すること。
- ・微生物を使った試験について、酸化還元状態との関連や、原位置の意味として坑道を掘った段階でディスターブされたものに対してどこを見るのか説明すること。
- ・処分概念オプションの体系化について、アウトプットのイメージを説明すること。

2 妥当性

- ・当初計画における研究期間20年程度について、平成10年当時どの様な背景や

状況があつて20年程度としたのか説明すること。

- 平成10年当時と現在の研究開発の取り巻く環境や状況変化がある場合は、それは何が変わったのか説明すること。
- 研究計画（案）の記載内容が、研究終了後は地下施設を埋め戻すことを明文化していると言えるのか説明すること。
- 当初計画に記載されている地下施設は、500m以深を目処に展開する試験坑道となっている。500mの試験について説明すること。
- 第4期中長期目標の考え方。
- 研究期間（終期）と埋め戻しの確認。

3 三者協定との整合性

- トレーサー試験の非放射性核種を使用する研究として、具体的な成果を得られるのか。成果を得られる場合は、なぜ代用できるのかなど理由を説明すること。
- 「第4期中長期目標期間を目途に取り組む」について具体的イメージを説明すること。
- 国内外の技術動向とは具体的にどの様なことが考えられるのか説明すること。
- 技術基盤の整備の完了というのはどの様な状態をいうのか、また、整備の完了確認は誰がどの様に確認をして判断するのか説明すること。
- 実際に研究というものが、三者協定を遵守しているのかの確認。